

聖金曜日・主の受難

福音朗読 ヨハネ 18・1～19・42

2024.3.29 19:30

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今、ヨハネの福音書に基づいて、わたしたちはイエス様の十字架の場面を思い起こしました。

ヨハネの福音書によれば、イエス様が十字架上で息を引き取られたあとに、アリマタヤのヨハネがたちがやって来て、ニコデモもやって来て、そしてもうすぐ安息日が始まってしまうので、大急ぎで近くの園の中にあったお墓に納めたということになっています。ですから、ゴルゴタの丘、十字架が立てられていた場所と、イエス様の遺体が納められていたお墓は近い場所なんです。実際にエルサレムの当時の城壁の門のすぐ外に、人々が見ることができる場所に十字架が立てられて——イエス様が枝で歓迎されて入って来た場所とは違う門ですが——、そしてその近くに葬られたというふうに言われていて、現代ではそこに聖墳墓教会という教会が建っています。

非常に早い時代からキリスト信者たちはその十字架が立てられていた場所とイエス様のお墓があった場所に集まって共に祈りするという習慣があったわけです。そこで、当時の——またこれも早い時期、西暦 120 年代頃です——ローマ皇帝がそこにキリスト信者たちが集まらないように、十字架が立っていた場所は小高い丘、イエス様のお墓があった場所はそこから窪地、谷になっていて、その谷のところにお墓があったと言われておりますけれども、その谷を全部丘の高さまで埋め立てて、そこにヴィーナスの神殿を建てたと言われてしています。

それで、イエス様の十字架とお墓の跡をみんな分からないように、埋め立てて無かったこととというか、隠してしまおうとしたわけですがけれども、それがためにかえってどこにお墓と十字架の場所があるのかっていうのが、そのヴィーナスの神殿の下にあるんだっていう形ですうっと記憶に留められて、そして今度キリスト教が公に信仰することができるようになったときに、その場所を特定することが、また今度はその神殿を壊して掘り返して発見できたっていうようなことなので、聖墳墓教会の場所そのものは、ただ適当にこの辺でしょうっていうふうに決めたというよりももっと歴史的にも信憑性が高いのではないかと——他のガリラヤ地方の巡礼地より信憑性が高いのではないかとと言えるわけなんです。

なんでこんな話をしているのかと言えば、イエス様の十字架そして死去の記念であるゴルゴタの丘とそれからお墓の跡っていうものを無かったことにしようとしていくら埋め立てたとて、それを隠しきることはできなかったその歴史上のローマの皇帝のしたその仕業のように、わたしたちの心の中にも、イエス様の十字架を埋め

立てて見えないようにしようとするっていう動きがあるのではないかと、しかしそうやっても隠すことはできないんだということなんです。

例えば、他の人の足りないこととか、あるいは社会の問題っていうことでその十字架の跡を埋めていく——つまりは、イエス様が自分の罪、このわたしの罪を取り除き、そしてその罪の傷跡を癒してくださる、そのために十字架を担われたっていう、そこを直視するのではなく、いろいろ自分以外の人々の問題っていうことを思い起こす、あるいは指摘するっていうことで、まさにその場所を埋めようとする。あるいは、「自分は信仰が薄いものですから」っていうその一言で——一見謙虚な言葉のように見えますけれども——自分の問題を直視するのではなくて、「もうそれで全部終わりです。あとは問いかけてください」っていうようなぐらいの形で、もうそれですべて蓋をしようとする。あるいは、もっとこじれている場合には、「神様はわたしを愛してくださる方だから、わたしはこのままで変わる必要がない。そのありのままのわたしを神様は愛して下さっているんだ」っていう非常にこじれた言い方です。それによってイエス様の十字架——イエス様がこのわたしのために十字架を担わなければならなかったっていう厳然とある罪の現実を埋め立ててしまおうとする。そういうこともあるんじゃないでしょうか。

しかし、本当に誰かを愛している人でしたらば、だれかが大怪我あるいは病気の苦しみのさ中にあるときに「いいですよ。あなたはそのままです」とは言わないはずで、むしろ、「ああ、できることならば、その苦しみを代わってあげたい」って、人間同士でも愛する人の苦しみを前にしては思う。そういう場面をわたしたちはたびたび見ることがあります。

そして、でも人間同士、人間は代わってあげることはできませんけれども、イエス様ご自身はこのわたしたちの罪の苦しみを代わってあげる、というか担うことを通して取り除くために、十字架の苦しみ、そして死を受け入れてくださった、というのが、今日記念している十字架のあるいはご受難の神秘ということなんです。

これから、今日の典礼の中ではわたしたちは十字架、救いのほんとの源である十字架を礼拝いたします。そのときに、本当にわたしたちを愛してくださるイエス様の愛に信頼して、そのイエス様がわたしたち一人ひとりのために、代わるために担ってくださった十字架に信頼して、イエス様がそれをなさらなければならなかった理由である、自分の中にある罪、そして罪によって傷ついている自分自身ということを直視する、本当の意味での謙遜と神の愛への信頼に基づいた勇気を持つことができますように。そうして、わたしたち一人一人が、イエス様がわたしたちのために担ってくださった十字架の前に立つ、その時でありますように。イエス様ご自身から与えられる励ましに信頼しながらこの典礼を進めて行きたいと思っております。